

攻撃的空想尺度作成の試み

Development of a Psychological Scale measuring Aggressive Fantasies:
a Preliminary Study

河野 和明

Kazuaki KAWANO

キーワード：暴力、攻撃性、空想、心理尺度

Key words : Violence, Aggression, Fantasy, Psychological Scale

要約

他者の身体的傷害を含む、攻撃的な空想をする傾向について測定する尺度を試作した。あらかじめ作成した71項目の質問文を予備調査の結果に基づいて22項目に削減した後、これらの項目と攻撃性尺度(日本版 BAQ)などによって質問紙を構成して調査を実施した。その結果、最終的に7項目からなる尺度を得た。尺度得点には性差が認められ、男性が女性よりも有意に高かった。この尺度得点について、攻撃性尺度得点および攻撃後の情動評定との関係を検討したところ、攻撃的空想傾向は身体的攻撃性と正の相関、攻撃後のポジティブ情動と正の相関、攻撃後のネガティブ情動と負の相関があることが明らかになった。また、攻撃的空想傾向と一部の反社会行動に正の相関が認められた。これらの結果は、直接的な攻撃を空想する傾向が強い者は、実際の攻撃性も高いことを一貫して示唆する。

Abstract

An attempt was made to develop a psychological scale, measuring tendency to have aggressive fantasies, including bodily injury to others. Based on the results of a preparatory study, the 71 items prepared for potential candidates for the aggressive fantasy scale were reduced to 22 items. Then, a questionnaire was constructed from the 22 items, aggression scale (Japanese version of the BAQ) and other related question items was administrated to Japanese college students. The 22 items of aggressive fantasies were reduced to 7 items as a final aggressive fantasy scale (AFS) in this study. Male scores of the AFS were significantly greater than female. Scores of the AFS showed significant positive correlations to physical aggression of the Japanese BAQ and to positive emotions after aggression. It also showed significantly negative correlations to negative emotions after aggression. There was a significant correlation between the

score of the AFS and total amounts of some items of antisocial behavior. These findings consistently suggested that persons who tended to have fantasies of direct aggression were actually aggressive.

問題

暴力と適応

喧嘩、虐待、暴力事件から国家間の戦争まで、人間の生活には激しい暴力を伴う葛藤事態が生じる可能性が常にある。たとえば、2007年の日本の犯罪認知件数は、殺人 1,199 件、傷害 30,986 件、暴行 31,966 件であり（法務省法務総合研究所, 2008）、最も犯罪の少ない先進国に数えられる我が国においても、激しい暴力は全体として恒常的に起こっている。

言うまでもなく、通常、暴力や殺人は反社会的な行為であり、特に、司法警察制度が整備された近代社会においては厳しい社会的制裁の対象となっている。しかし、万一それが実行可能な場合、条件によっては個人を非常に有利に導きうる側面をもつ(Buss, 2005)。

一般に、適応度への影響が甚大な問題について、人間は相反する複数の戦略オプションを準備していると考えられる。たとえば、Trivers (1971) は、人間は他者との利他的なやりとりからの利益を享受しつつ一方的に搾取されるのを防ぐさまざまな心理的メカニズムをもつと同時に、状況が搾取に有利となれば自分が搾取を働く心理メカニズムを進化させていると仮定する。

激しい暴力は、被害者に多大な生物学的コストを強いる一方、加害者には潜在的に大きな利益をもたらすことから、きわめて重大な適応問題となる。実際、人間の進化的過去においては、殺人などの暴力行為がかなり頻繁に起こっていたと推定される(Wrangham & Peterson, 1996)。したがって、人間の心理システムには、加害と被害の両方について、暴力へ何らかの備えがあるだろうと予想される。

空想の機能

空想は、その備えを実現する認知的な手段のひとつとなる可能性がある。空想は「現前の現実世界とは別の虚構世界を表象する精神活動あるいはその産物」と定義される(中嶋ら, 1999)。松井(2001)は、空想の機能に、(1)願望充足、(2)状況を検討して解決策を模索する認知技能、(3)将来の行動のリハーサル、(4)感情の調節の4種を指摘した。これらのうち、明らかに(2)(3)の機能は、多様な行動的戦略を心的にリハーサルすることによって、その戦略を将来的に実行した場合（もしくは実行しなかった場合）の認知的・行動的精緻化をはかるものと考えられる。すなわち、空想は、少なくとも部分的に、さまざまな適応課題解決の潜在的戦略オプションを準備するように機能しているものと思われる。

暴力と空想

適応論的な観点から暴力的空想を検討した例として Kenrick & Sheets (1993) の殺人ファンタジー研究がある。彼らは、健常な米国人に調査を実施し、他者を殺害する空想の頻度を尋ね、殺人の空想をしたことがある人の割合がかなり高率である（男性 73%、女性 66%）こと、男性の空想上の被害者は女性よりも多様であり、かつ、より長くより詳細な空想を報告することなどを示した。そして、空想の全体的な特徴が実際の殺人の特徴の一部を反映していることを明らかにした。これらの知見は、攻撃的な空想が攻撃的戦略の潜在的な準備であることを間接的に示唆するものと思われる。こういった知見をはじめとするさまざまな攻撃研究に基づき、近年では、殺人が進化的な選択圧を受けて人間に備わった心理メカニズムであるとする仮説（殺人適応仮説 homicide adaptation theory; Duntley & Buss, 2008）も提示されている。

本研究の目的

このような議論の一方、本邦における攻撃的空想の研究は少ない。そこで本研究では、今後さらに攻撃的空想を検討していくことを踏まえ、ひとまず、空想傾向を測定する心理尺度の作成を試みる。そして、攻撃的空想傾向は、一般的な心理的攻撃性および攻撃後の情動の自己評価とどのような関連をもつのかを検討する。また、付加的に反社会的行動の経験量の報告との関連を見る。これらによって、心理尺度によって測定する攻撃的空想傾向の特徴を探索的に検討する。

予備調査

予備調査では、あらかじめ考案した攻撃的空想を評価する質問項目を取捨選択して絞り込み、次に行う調査に用いる項目を決定することを目的とした。

方法

調査対象者：大学生 91 名(男性：36名、女性：54名、不明：1 名)を対象とした。回答者の平均年齢は 20.3歳(SD=2.23)であった。

質問紙：攻撃的な空想に関連すると思われる質問文を多数考案したのち、意味内容から尺度項目の候補を取捨選択して43文に絞った。質問紙では、これらに対する自己評定を5件法によって求めた。

手続き：調査は、大学の心理学系授業の一部を利用して集団実施された。回答に記名は求めなかった。

結果と考察

43項目に対し因子分析(主因子法、バリマックス回転)を実施したところ、固有値の減衰状況から3因子解が妥当と考えられた。

攻撃的空想尺度の候補項目を選定するため、第一因子および第二因子に約.5以上、第三因子に.4以上の負荷を示した項目から、複数因子に.4以上の負荷を重複して示す項目を除外したところ、24項目を得た。抽出した24項目には、自傷行為を含む2項目があり、これらは測定対象の趣旨から外れると考えられたため除外した。結果的に、22項目を攻撃的空想尺度の候補とした(表1)。因子負荷量は第一因子が13.81(寄与率32.11%)、第二因子は2.99(同6.96%)、第三因子は2.45(同5.71%)であった。項目内容から、第一因子は一般的な攻撃的空想、第二因子は弱者虐待、第三因子は性的暴行に関する因子と考えられたが、因子を構成する項目に一部内容的な混在が見られたため、22項目すべてを次の調査に投入し、再検討することにした。

表1. 攻撃的空想尺度の候補となった評定文

-
1. 気に入らない人を間接的におとしめることをよく想像する
 2. 他人の武勇伝を聞き、それを自分に置き換えて想像することがある
 3. 悪意をもって人を傷つける想像をすることはほとんどない
 4. 家族に対し、暴力をふるう想像をすることがよくある
 5. 自分の感情をまどわすものを破壊することをあれこれと想像することがある
 6. 気にさわることをした相手を殴る想像をよくすることがある
 7. 友人を殴りたいと思うことはほとんどない
 8. 強い者をおとしめる想像をすることはほとんどない
 9. 動物を傷つける空想を抱くことがよくある
 10. 人の出入りがあるところに汚物をまきちらす想像をすることがある
 11. 日常的に暴力を振るえる環境に居たいと思うことがある
 12. 人や動物に対してナイフを使ってみるところを空想することがよくある
 - 13.気に入らない同性に対し性的暴力を加え、屈辱を味わわせたいと空想することがよくある
 14. 弱い者いじめの方法をあれこれと思いつかべることがある
 15. 他者をはずかしめる想像をよくすることがある
 16. 車ごと建物に衝突することを想像することがある
 17. レイプする想像をしたことはほとんどない
 18. 暴力によって異性をおとしめるシーンを心に描くことはほとんどない
 19. 見知らぬ他人に暴力をふるいたいと思ったことはほとんどない
 20. 戦争に行き敵を倒すところをよく想像することがある
 21. 動物が車にひかれるところを想像することはほとんどない
 22. 不快な容姿の人を見て、顔を殴りつけることを想像することがよくある
-

調査

本調査の目的は、予備調査によって取捨した項目について、尺度として一定の信頼性をもつ項目に削減し、暫定的な攻撃的空想尺度を作成することである。さらに、既存の攻撃性尺度、攻撃後の情動評定を実施し、攻撃的空想尺度得点とこれらの関係を明らかにすることも試みる。また、付加的に反社会的行動の経験に関する質問を実施し、その経験量と攻撃的空想傾向との関係も検討する。

方法

調査対象者：大学生 254名（男性 85名、女性 156名）に対して調査を実施した。平均年齢は 19.6 歳(SD=1.28)であった。なお、回答に信頼がおけない質問票はあらかじめ分析から除外した。

手続き：調査は大学の心理学系授業の一部を利用して集団実施された。回答に記名は求めなかった。

質問紙の構成：予備調査で抽出した攻撃的空想項目(表 1)、攻撃性を測定する日本版 BAQ (Buss-Perry Aggression Questionnaire: 安藤ら, 1999)、攻撃行動後の情動を問う項目から構成した。また、参考までに実際の反社会行動の経験を問う質問を付加した。攻撃行動後の情動は「イライラしたときや腹が立ったときに、人や物に当たる(攻撃をする)とあなたはどのような感情を持ちますか」との問いに対し、「気分がすっきりする」「満足感がある」「楽しくなる」「罪悪感がある」「後悔する」「悲しくなる」「自分に対して腹が立つ」「不安になる」「怖くなる」の 9 種の情動を評定するものであった。実際の反社会行動の経験については、「いらついた時にものを壊したことがある」「他人(家族以外)に暴力をふるったことがある(ケンカなど)」「20歳前に飲酒をしたことがある」「20歳前に喫煙をしたことがある」の各項目に対し、「はい」「いいえ」で回答を求めた後、中学校、高校、大学のそれぞれの時期別におおよその回数を尋ねた。同時に、回数が多く記入が困難な場合に備え、選択肢「いつも」を設定した。攻撃的空想項目、日本版 BAQ、および攻撃行動後の情動は 5 件法で回答を取得した。

結果と考察

攻撃的空想尺度の検討

攻撃的空想尺度の候補項目について因子分析(主因子法、バリマックス回転)を実施したところ、固有値の減衰状況から 2 因子解が妥当と考えられた。各因子に高い因子負荷を示した項目から、両因子に約.45 以上の負荷をもつ項目を除外して再び因子分析を行った。これら 2 つの因子は、項目内容から、それぞれ直接的攻撃因子、性暴力因子(項目例:「レイプする想像をしたことはほとんどない」と考えられた。本研究では、身体的な直接的攻撃に関する空想を対象とするた

め、以降、第一因子のみを尺度化の対象とした。第一因子にのみ高い負荷を示す項目から、逆転項目を残しつつ内容的に一貫すると思われる項目に絞り込んだところ、7項目が選定された(表2)。 α 係数は.76であり、当該項目を除いた合計得点に対する各項目の相関係数は.32～.55であった。G-P分析を行ったところ、すべての項目に高い弁別力が認められた。 α 係数が当該項目除外前より増大する項目はなかった。これらの結果から、当該7項目には尺度として一定の信頼性が認められると判断された。

表2. 攻撃的空想尺度項目

項目内容	得点		
	男性	女性	有意差
悪意をもって人を傷つける想像をすることはほとんどない#	2.87(1.32)	2.48(1.25)	*
気にさわることをした相手を殴る想像をよくすることがある	2.98(1.42)	2.25(1.30)	**
友人を殴りたいと思うことはほとんどない#	2.12(1.22)	1.76(1.12)	*
強い者をおとしめる想像をすることはほとんどない#	2.94(1.24)	2.22(1.19)	**
動物を傷つける空想を抱くことがよくある	1.29(0.74)	1.19(0.69)	n.s.
人や動物に対してナイフを使ってみるところを空想することがよくある	1.38(0.82)	1.35(0.89)	n.s.
弱い者いじめの方法をあれこれと思い浮かべることがある	1.62(1.00)	1.44(0.81)	n.s.
合計得点	15.20(4.85)	12.71(4.56)	**

#は逆転項目、()内は標準偏差、有意差は t 検定による；** $p<.01$ 、* $p<.05$

性差

攻撃的空想尺度得点について、 t 検定によって男女の平均値の差を検討したところ、男性(平均得点 15.20)が女性(平均得点 12.71)よりも高かった($t(237)=3.95$, $p<.001$)。これは、殺傷を中心とする身体的な攻撃に関する空想量は男性が多いとする先行研究(Kenrick & Sheets, 1993; Kawano & Ito, 2009)と一致する。

同様に、日本版 BAQ について、下位項目の短気、敵意、身体攻撃、言語攻撃に対しそれぞれ t 検定を行ったところ、身体的攻撃にのみ有意差がみられ、男性(平均得点 19.71)が女性(同 17.08)よりも得点が有意に高かった($t(237)=3.76$, $p<.001$)。この結果も、とりわけ身体的な攻撃性は女性に比べ男性が高いとする従来(たとえば概説は、河野, 2007)と一致する。

攻撃行動後の情動の評定値について t 検定を行った。「楽しくなる」「不安になる」「怖くなる」の3項目に有意差が認められ、「楽しくなる」の平均評定値は男性(平均得点 2.00)が女性(同 1.70)より高く($t(146.81)=2.07$, $p<.05$)、「不安になる」は女性(平均得点 3.31)が男性(同 2.71)より高かった($t(236)=3.61$, $p<.001$)。同様に「怖くなる」は女性(平均得点 2.99)が男性(同 2.64)より高かった($t(237)=2.13$, $p<.05$)。

相関分析

以降の相関分析においては、一部に男女で相関の違いが見られたものの、両性で相関の傾向は同一であったので、男女込みの分析のみを示す。

まず、攻撃的空想尺度と日本版 BAQ の相関を算出した(表 3)。短気・敵意・身体的攻撃に対して 1%水準で有意な相関がみられた。また、言語的攻撃に対して 5%水準で有意な弱い相関がみられた。このことから、攻撃的空想傾向が高い人は、怒りを喚起しやすく、身体的な攻撃性も高いことが示唆された。

表 3. 攻撃的空想尺度と BAQ の相関係数行列

	1	2	3	4
1. 攻撃的空想尺度				
2. BAQ 短気	.31**			
3. BAQ 敵意	.34**	.38**		
4. BAQ 身体的攻撃	.55**	.35**	.23**	
5. BAQ 言語的攻撃	.14*	.19**	.02	.25**

correlation(*r*) ***p*<.01, **p*<.05

さらに、攻撃後の情動 9 種の評定と攻撃的空想尺度・BAQ との相関を算出した (表 4)。

表 4. 攻撃的空想尺度得点および BAQ 得点と攻撃後の情動評定値との相関係数

情動	攻撃的空想 尺度	BAQ 短気	BAQ 敵意	BAQ 身体的攻撃	BAQ 言語的攻撃
気分がすっきりする	.24**	.27**	.16*	.28**	.06
満足感がある	.32**	.29**	.18**	.30**	.06
楽しくなる	.34**	.17**	.20**	.20**	.04
罪悪感がある	-.20**	-.07	-.11	-.25**	-.14*
後悔する	-.15*	-.06	-.05	-.23**	-.08
悲しくなる	-.22**	-.04	-.00	-.28**	-.06
自分に対して腹が立つ	-.15*	-.03	.02	-.26**	-.04
不安になる	-.04	.08	.15*	-.20**	-.02
怖くなる	.01	.04	.17**	-.20**	-.01

correlation(*r*) ***p*<.01, **p*<.05

攻撃的空想尺度得点は、項目「気分がすっきりする」「満足感がある」「楽しくなる」と有意な正の相関を、項目「罪悪感がある」「後悔する」「悲しくなる」「自分に対して腹が立つ」と有意な負の相関を示した。これらは、攻撃的空想傾向が高いほど、攻撃後にポジティブ情動を感じる

一方、ネガティブ情動は感じない傾向があることを示唆する。これらの傾向は、BAQの身体的攻撃得点と類似していた。

参考までに、実際の反社会行動の経験と攻撃的空想尺度との関係を検討した。[いらついた時にものを壊したことがある(以下、「物破壊」)] [他人(家族以外)に暴力をふるったことがある(ケンカなど)(以下、「他人暴力」)] [20歳前に飲酒をしたことがある(以下、「未成年飲酒」)] [20歳前に喫煙をしたことがある(以下、「未成年喫煙」)]の各項目について、経験量を算出するために、中学・高校・大学の各時期の回数をすべて加算した上、選択肢「いつも」は100回相当と見なし、100を割り当て合計値を算出した。その後、攻撃的空想尺度・BAQとこれら経験量との相関を算出した(表5)。

表5. 空想攻撃尺度得点およびBAQ得点と自己報告による反社会行動の経験量との相関係数

反社会行動	攻撃的空想 尺度	BAQ 短気	BAQ 敵意	BAQ 身体的攻撃	BAQ 言語的攻撃
物破壊	.07	.15*	.10	.10	.11
他人暴力	.18**	.03	.11	.18**	.16*
未成年飲酒	.14*	.06	.09	.16*	.14*
未成年喫煙	.17**	.05	-.00	.11	.04

correlation(r) ** $p < .01$, * $p < .05$

BAQと各経験量との間には、弱い有意な正の相関が散見され、それらは、BAQの尺度内容と対応する妥当なものと思われた。攻撃的空想尺度得点は、「他人暴力」「未成年飲酒」「未成年喫煙」の各経験量と弱い有意な正の相関を示した。攻撃的空想尺度との相関係数の値は、BAQの下位項目と各経験量との相関と比較して、同程度以上の関係があることを示している。すなわち、攻撃的空想傾向が高い者は、自覚的な反社会的行動の経験量が多く、そこには一般的な攻撃性尺度と同程度以上の関係があることが示唆された。ただし、これらの経験量については数値の正確さが保証されない上、長期間の過去にさかのぼる懐古的な自己報告に基づく測定であり、誤差や回答者の認知バイアスが大きく生じている可能性がある。したがって、ここでの結果は補足的な知見と考えるべきであろう。

以上、本研究で試作した「攻撃的空想尺度」は、一定の内的一貫性を示し、心理尺度として利用可能なものであると考えられる。しかしながら、尺度項目の内容を批判的に検討すると、必ずしも直接的な攻撃を意味しない項目(「強い者をおとしめる想像をすることはほとんどない」「弱い者いじめの方法をあれこれと思いつかせることがある」)、空想そのものとは異なる内容の項目(「友人を殴りたいと思うことはほとんどない」)などが混在しており、相当程度、改善の余地があると考えられる。特に今後、殺傷を含む暴力的な空想を対象とする尺度を開発する場合は、項

目内容をいっそう吟味して構成する必要があるだろう。

本研究で得られた攻撃的空想尺度において、その得点は一般的な攻撃性尺度（BAQ）得点と正の相関を示し、攻撃後のポジティブ情動と正の相関を、攻撃後のネガティブ情動と負の相関を示し、反社会的行動の一部と正の相関を示した。これらの結果は、攻撃的空想傾向が高い攻撃性と関連していることを一貫して示唆している。

このことは、攻撃的空想が現実の行動的戦略オプションに関するリハーサル機能を果たしているとする観点に間接的な支持を与えるものと考えられる。同時に、個人の認知的な情報処理過程のバイアスが攻撃性を高めるとする、社会的情報処理理論(Dodge, 1986)などの観点からも解釈が可能であろう。

今後は、攻撃的空想の特徴が先行研究と一致するか否かを確認すること、その認知的特徴をいっそう明らかにすると同時に、攻撃的空想の機能を検討することが課題となる。たとえば、攻撃対象者の特徴や自身が被害者になる空想を検討の対象とし、対人関係調整などに攻撃的空想が果たす役割を明らかにすることが研究のひとつの方向性と思われる。

文献

- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子 1999 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(BAQ)の作成と妥当性, 信頼性の検討. 心理学研究, 70, 384-392
- Buss, D. M. 2005 *The murderer next door: Why the mind is designed to kill* (バス, 荒木文枝 訳 2007「殺してやる」柏書房)
- Dodge, K.A. 1986 A social information processing model of social competence in children. In M. Perlmutter(Ed.), *Eighteenth Annual Minnesota Symposium on Child Psychology* (Vol. 18, pp.77-125). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Duntley, J. D. & Buss, D. M. 2008 The origins of homicide. In Duntley & Shackelford (Eds.) *Evolutionary Forensic Psychology*. pp.41-64, Oxford University Press.
- 法務省法務総合研究所(編) 2008 犯罪白書 平成20年版. 太平印刷社.
- 河野和明 2007 「攻撃性」 鈴木直人(編著) 朝倉心理学講座第10巻 感情心理学 p.154-171.
- Kawano, K. & Ito, K. 2009 Sex Differences of Emotions after Fantasies of Homicide and Bodily Injury. *International Society for Research on Emotion 2009 Leuven(August 6-8) Program*, p.114.
- Kenrick, D. T. & Sheets, V. 1993 Homicidal fantasies. *Ethology and Sociobiology*, 14, 231-246.

松井めぐみ 2001 空想は不健康か？(1)－空想研究の概観－. 筑波大学臨床心理学論文集, 16, 49-55.

中嶋義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁桝算男・立花政夫・箱田裕司(編)1999 心理学辞典, 有斐閣.

Trivers, R. 1971 The evolution of reciprocal altruism. *Quarterly Review of Biology*, 46, 35-57.

Wrangham, R. & Peterson, D. 1996 *Demonic males*. Boston: Houghton Mifflin.

謝辞

本研究の実施に協力した成瀬清香さん（東海学園大学人文学部平成15年度卒業生）に感謝申し上げます。